

まるで【小鬼】のよう
な……

沙希斗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは「ゴブリンスレイヤー」のアニメを見て「モンスターハンター」の世界で思
付いた短編です。

一応「一話」がモチーフになっていますが、そのものではないので違和感がある人も
いるかもしれません。

なお、主人公のモデルは自作の短編集「今日も元気に対ゼポルタ広場からお届けしま
す。」のキャラなので、「ゴブリンスレイヤー」ではありません。

※かなりグロテスクな描写がありますので、苦手な人は注意して下さい。

目

まるで【小鬼】のような……

|

次

1

まるで【小鬼】のような……

冷たく硬い地面の感覚に気付いて目を開けた彼女は、自分がどうやら洞窟に寝かされているのだと理解した。

というのも、目に映ったものが鍾乳石だつたからである。

見回しながらそろそろと起き上がるとして、全身が疼いて崩れる。

呻きつつ、そうかと彼女は思い出した。

そして同時に戦慄に怯え、とにかく逃げようと這いずろうとした。

だがそんな気配を察したもののが何事か言いながら近付くと、仲間に声を掛け、耳障りな声を発しながら彼女の防具を剥ぎ、転がし、弄んだ。

新人P.T.が行方不明になつたという連絡を受けて捜索のために【沼地】に来ていたハンターは、洞窟の暗がりで身の毛もよだつ光景を目にして縮み上がつた。

見付けた一人は体中をズタズタに裂かれ、夜目でも見える程に体の一部や防具の切れ

端が至る所に『転がっていた』。

しかし肉食の【モンスター】に食い散らかされた訳では無いようだつた。

何故なら【彼ら】が付けたような牙の痕が一切無かつたからである。

代わりに切れ味の悪い刃物で切り刻まれた痕が無数にあつた。

更に言うと、どうもそういう武器だけで攻撃してここまで『残骸に』なつてしまつたらしいと分かつた。

若い男と思われる『それ』には武器が無かつた。

ハンター用の武器種のみならず、【剥ぎ取り用ナイフ】や【投げナイフ】の類いも見当たらなかつた。

体や防具は『残つていた』事を見ると、どうやら何者かが武器だけ奪つて行つたらしかつた。

『残つていた』物は『丁寧にひっくり返したりして念入りに調べた形跡があり、なににそこまでしていたのにポーチの中身は手を付けられていないようだつた。

という事は、相手の目的は武器を奪う事だけだつたのだろうか？

だがおかしな点があつた。

傷から言つてどう見ても（切れ味は悪いにしろ）人間の武器で攻撃されたとしか思えない形状をしているのだが、もし【人間】だつたとしたら、ここまで惨たらしい殺し方

をするだろうか？

もしそうだつたとしたら悪魔の所業としか思えない。

ただ武器を奪う目的だけなら、例え集団で襲い掛かつたにしても致命傷を与えれば気が済んでいるはずなのだ。

一人の男をここまで徹底的に攻撃する必要は無い。

もしも憎くて堪らないというような事があつたとしても、防具も体も、内臓も含めてそこら中にぶちまける程ズタズタにするだろうか？

楽しんでやがる。

彼はそう思つた。

きっと犯人は躊躇殺す事を楽しんでいるのだ、と。

そんな悍ましさに吐き気を催しながら、更に奥に進む。

だが、本当はもうこれ以上進みたくないと思つていた。

奥に進む程に更に凄惨な光景が待つてゐるにしか思えなかつたからである。

そして、予想は当たつてしまつた。

奥に『転がされていた』のは若い女だつた。

しかし彼女は幸いな事に『綺麗な形を保っていた』。

保つてはいたのだが、防具は全て剥ぎ取られていた。

今度はハツキリとその姿が浮かび上がっており、夜目で見る必要が無かつた。ご丁寧に大きな『ライトクリスタル』の結晶塊の前に転がっていたからである。

そのまままるで祭壇に祀られているかのような姿を見て、しかし彼は神々しいと思うどころか絶句していた。

何故なら、その祭壇であるかのような場所が、血の海になつていたからである。

近寄るのも憚られるような場所に躊躇した彼だが、意を決して近付く。

遠目で見て確信はしていたが、やはり既に彼女の息は無かつた。

体中に痣と切り傷がある。

その上に強姦を試みた痕まであつた。

恐らく気が済むまで弄んで犯して、挙句の果てに殺したのだろう。

彼女の両目は、潰されていた。

そして、血と交じつた涙の痕があつた。

苦悶に歪んだままで固まっている彼女の表情に憤怒を露わにしつつ、彼女の身体をそつと持ち上げる。

そのまま担ごうとしている、周りで一気に殺気が膨らんだ。

ぎくりとなつて見回すと、いつの間にか小さな人型に囲まれていた。
【彼ら】は老いさらばえた枯れ木のような緑褐色の肌を持ち、奇妙な面を被つていた。
きつきつきい！

その内の一人が片手を天に向けて上げ、叫んだ。

よく見るとその手には、折れた武器が握られている。

それだけではなく、どうも【彼ら】全部が似たように切れ味の悪そうな武器を持つていた。

そうしてそれを合図にするかのように、【彼ら】はそれぞれで耳障りな甲高い声を発しながら一斉に向かつて來た。

「……悔しいです……。連れて帰れません、でした……っ！」

【医務室】に赴いた【ギルドマスター】は、全身包帯だらけで悔し涙に咽ぶ男の話を聞いていた。

「——では、「チャチャブー」で間違い無いのじやな？」

「はい。あの集団は間違い無く「チャチャブー」でした。【小鬼】とも呼ばれる【ゴブリン】に似てなくもなかつたですが、【ゴブリン】なるものは御伽話や小説の類いでしか今

の所見た事がありませんからね』

「そうじやのお……」

「それらの話で出て来るものを読むと、性格的には【チャチャブー】も【小鬼】のようですが。……むしろ『小鬼そのもの』とも言えるでしょうね」

「あ奴らほど残忍な奴らは儂も知らん。……もつとも、生活区域に近寄らなければ何ら被害は無いはずなんじやが——」

「やはり、新人が知らずに洞窟内の生活区域に入った。と見るしかないのでしょうか……。残念な事ですが」

「そうなるのお……。じやが、こればっかりは各自で気を付けてもらうより他は無いからのぉ」

「通達は常に出されてますもんねえ」

「んむ……」

しかし数日後、再び似たような事件が起こつた。

それで「どうも【チャチャブー】が活発化、もしくは大繁殖しているのではないか?」となり、間引きの依頼が頻繁に出されるようになった。

そんな中、【密林】の洞窟内で【チャチャブー】に追われ、死に物狂いで逃げ惑つてい

る二人がいた。

彼らもまだハンター駆け出しの恰好をしていた。

そして一人を半ば引き摺るようにして、彼女はまろびながら逃げていた。
必死の形相は恐怖に歪み、涙でぐちやぐちになつていて。

それでも歩みを止めないのは、仲間を見捨ててしまつたという負い目があつたからである。

彼女のPTは既に二人が犠牲になつっていた。

そしてその一人に「私達が引き付けている間に逃げて」と懇願され、身を引き裂かれる思いでここまで逃げて来たのだ。

が、足がもつれ、とうとう転んでしまつた。

「ごめんなさい」

その日に組んだPTだつたが大怪我をした一人を気遣う彼女。

しかし先程から逃げながらも【応急薬】やら【回復薬】やらなけなしの【回復薬グレー
ト】やらを掛けてはいるのだが、回復する兆しが無い。

それどころか血を吐いたりして、ますます容体が悪化しているように見えた。

「なんで!? どうしてっ!」

彼女はパニックになつっていた。

今まで回復系が怪我に効かないなどという事は無かつたからである。

そんな時、風を切る音がしたと思つたら二の腕に痛みが走つた。

短い悲鳴を上げてそこを押さえようとした彼女は、そこに長い棘のようなものが突き刺さつているのを見た。

そして暗がりから、耳障りな甲高い声を発しながら近付いて来たものを見た。

「きやあああああっ!!」

とうとう【チヤチヤブー】に追い付かれたという事実に絶叫する彼女。

逃げようとしたが腰が抜けてしまい、その場に座り込んでガチガチと歯を鳴らす事しか出来ていない。

その内股の間から黄色っぽい液体が滲み出たのを見た【チヤチヤブー】は、まるで嘲笑しているかのようにそんな仕草をして声を上げた。

と、そんな中洞窟の出口があると思われる方から音がした。
「ひつ!?」

仲間が現れたと思い、息を飲む彼女。

が、反応した【チヤチヤブー】は明らかに嫌悪感を抱いたようで、隣にいた仲間に何やら合図した。

ヒュツ！

再び風切り音がして、【彼】の口元（奇面の中）から自分に刺さつたと同じ長い棘が飛び出したのを彼女は見た。

つまり、【吹き矢】を使つてゐるらしい。

しかし直後に聞こえたのは刺さる音では無く、叩き落とすような音だつた。

そしてやや間があつて、ゆっくりとした音が近付いて来、それは足音だと分かつた。重々しいそれとともに、徐々に姿が見えるようになる。

それを見た彼女は再び息を飲んだ。

人の形はしているが、黒く、刺々しい姿をしていたからである。

恐らくハンターだろうという事は分かるのだが、大きく、威圧感のあるその姿は【モンスター】にも見える。

怯えて見上げていると、【チャチャブー】が襲い掛かつて行つた。

「逃げ——」

言い掛けた彼女の耳にぐしやりという何かが潰れたような音が届く。

そして目の前に落されたのは、頭を潰された【チャチャブー】の死体だつた。

「ひつ！ ひいいつ！」

恐怖に慄いている彼女は、低い呟くような声を聞く。

「……。まずは、一匹……」

それは、まるで肉食獣が喰るような男の声だつた。

「二匹、三匹……」

続いて潰れたような音と共に、数える声が漏れる。

そうやつて數えながら次々に「チャチャチャブー」の頭を潰していく彼は、静かになつたのを知つて「ふん、こんなものか……」と呟いた。

「……あ、あああ……」

「怖がらんでも良い」

のしのしと近付いた彼に怯えて碎けた腰のまま逃げようとして、そう声を掛けられる。

「……。やはり、毒だな……」

無言のまま刺さつていた吹き矢を抜かれて痛みでビクつくと、そう呟かれて「え!?!」となつた。

「【チャチャチャブー】は毒武器を使う事がある。これを飲んでおけ」

【解毒薬】を渡されて慌てて飲むと、「ほれこれも」と【回復薬グレート】を渡された。「ありがとうございます……」といいます……」

戸惑いながらもお礼を言つてはいるが、脇に倒れていた一人の状態を見てはいた彼がこう言つた。

「これは、もう駄目だな……」

「そ……、そんなのって……！」

「毒が回り切つてはいる。こうなつてはもう【解毒薬】では助からん」

「そんな！　まだ息はありますっ！　すぐに連れて帰つて——」

「無駄だ。この様子では帰るまで持たん。苦しみを長引かせるだけだ」

その時、擦れてかなり聞き取りにくかつたが、弱々しい声が聞こえた。

「……ろ、し……て……」

「……。承知した」

そう言つた彼は腰から【剥ぎ取り用ナイフ】を引き抜くと、躊躇無く喉に突き立てた。苦しんでいた彼女は涙を溢れさせながら何か言いたげに口を動かし、それから目の光が消えた。

「ごめん……なさい……」

見開いたままだつた死体の目を閉じながら、彼女はぼろぼろと涙を零し続けた。

「ごめんなさい、ごめんなさい……」

「……。仲間か？」

「いいえ、今日組んだばかりでした……」

「……。 そうか」

「でも、でもすぐに仲良くなれたのに……。 他のみんなも……」

「他に、仲間がいたのか？」

「はい……。 でも、私達を逃がすために……」

「この奥か？」

俯いて涙ながらにそう零した彼女に、彼はそう言いながらそちらの方向へ顔を向けた。

「そうです」

その返事を待つ前に、彼はもう移動を始めていた。

「待つて下さいっ！ 私も——」

「恐らくどうに殺されているだろう。かなり惨たらしい状態になつてているはずだ。……見ない方が良い」

そう言われて逡巡したが、それでも彼女は意を決して「でもっ！ でも確かめないとっ！ し……死んでいるならいるで、その事実を確かめないとっ！」と訴えた。

「……。【チャチャチャブー】はまだ全滅していない。付いて来るなら命の保証は出来んぞ」「わ……っ。 私だつてハンターです。その覚悟は出来ています！」

「震えながら言われてもなあ」

喉の奥でくつくつ笑いながらそう言われ、彼女はそれでも無理に立ち上がり、「こつちですっ！」と駆け出した。

彼はその様子に鼻で笑うと、ゆっくりとした足取りで付いて來た。

急いでいないのは大股で歩いていれば追い付くからであつた。

「う——うええつ！」

先に（というよりはほぼ同時に）到着した彼女は、案の定そこに見えた光景が目に入つた途端、胃の中のものを全部外に吐き出した。

二人分と思われる死体が、『そこら中に転がつていた』からである。

「……。やはりな」

対して彼は兜の中で眉一つ動かす事無く淡々とそう言つてのけ、躊躇すらせずにずかずかと中に踏み込んだ。

『転がつている』ものを踏まずには歩けなかつたにもかかわらず、である。

「巣があるとすれば、もう少し奥か……」

そんな事を呟きながら更に奥に入ろうとしている彼に、彼女は「待つて……」と消え入るような声で言つた。

「……。だから来るなと言つたのだ」

一応立ち止まつた彼は少しだけ振り返り、呆れたように言つた。

「もう気が済んだだろ。サツサと外へ出でいろ」

しばらくは立てないだろなと思いつつも、彼はそう言つた。

この場所は一本道なので背後から襲われる事は無い。

ならば一人でも帰れるだろという判断である。

「……て……、手伝いますっ！」

だが彼女は健気にもそう言つた。

「足手纏いだ。死ぬ前に逃げておけ」

「せ……つ、せめて、この人達の仇を——」

「必要無い。それは俺一人が討つ」

「で……！ ですが、この先にはきっと沢山の数の「チャチャブー」が——」

「例え数百に囲まれようと俺は後れは取らん。お前がいれば逆に巻き込んでしまう」

「ですが、それでは怪我を——」

「この程度で受ける傷など大した事は無い」

「で、では……つ。ではせめて、遠くから見させて下さい！ 決して邪魔はしま

せんからつ！」

「……。ずっと隠れていると、誓うか？」

あまりにしつこく食い下がる彼女に、彼はどうとう根負けしたように言つた。

「はい。誓いますっ！」

「俺に何があつてもそうすると、約束してくれるか？」

「はい。しますっ！」

「死んでも、か？」

思わず黙つてしまつた彼女。

だが彼はしやがんで目線を合わせる（それでも見下ろす格好になつたが）と、更に念を押した。

「俺が死んでもその場を動くな。それが出来ねえなら今すぐ外へ出ろ」

そして、ポーチから【モドリ玉】を出して彼女に押し付けた。

「……。分かりました。死んでも隠れていると、約束します……」

彼女はそれをそつと押し返し、震え声ながらもそう言つた。

「くれぐれも、違えてくれるなよ？」

彼はそう言つて【モドリ玉】をポーチに仕舞い、奥へと足を踏み出した。

進むにつれて徐々に空間が広がつていき、明るさも増していつた。

彼は「ここに隠れていろ」と囁き、明と暗の境目ぐらいの少し登った鍾乳石の入り組んだ陰に、彼女を潜ませた。

そして「念のためにやはり持つておけ。身の危険を感じたら即使え」と、先程の【モドリ玉】を握らせた。

「あ、あなたは……？」

囁いた彼女に、彼は「俺の事は一切気に掛けるな」と囁き返し、それに対して何か言おうとした相手を無視して暗がりからいきなり明るい場所へ踊り出た。

そこは比較的開けた場所になつており、明るいのは【ライトクリスタル】の結晶が至る所に生えていたからだつた。

その中の、一際大きな結晶塊の前に、まるで供えるかのように赤黒い塊が置いてある。その周りには赤い染みが広い範囲で付いており、どう見ても血であるとしか思えない。

赤黒い塊は遠目で何かの肉だろうと思われたが、近付くと『どうやら人らしい』と分かつた。

「まつたく。良い趣味をしてやがるぜ」

彼は兜の中で笑みの形に口を歪めながら呟いた。

一応調べようと『人らしい塊』に近寄ると、途端に殺気が膨れ上がった。

とつぶくにそんな事には気付いていた彼は、囮んでいるものをゆつくりと見回してから一点に目を止め、嬉しそうに言つて片膝を付くと、頭を垂れた。

「これはこれは、御拝謁賜り、恐悦至極」

そこには【キングチャチャブー】が立つていた。

無数の【チャチャチャブー】に取り囮まれている状態で、そんな無防備な姿を晒すのは自殺行為である。

それどころか惨殺して下さいとでも言いたげな様子に、見ている彼女は正氣を疑つた。

ましてや【キングチャチャブー】がいるのだ。これで彼の死は確定したものと彼女は絶望した。

しかも、彼は相手が一斉に向かつて来ているというのに微動だにしていない。

それどころか気付いてないのか敬意を示して目を閉じたままである。

兜の隙間から覗いている目が閉じられているのが見えた彼女は、戦慄に慄きつつもそれを振り払つて声を掛けようと口を開けた。

が、既に遅く、片膝を付いて項垂れたままの彼は、無数の【チャチャチャブー】に覆われ

て見えなくなつてしまつた。

しかし彼女が悲愴な顔で目を覆おうとしたその刹那、その【チャチャブー】が全て吹き飛んだ。

何が起こつたか分からなかつたのは彼女だけではなく【チャチャブー】達もそうだつたようで、遅れてようやく彼女と共に彼を中心とした死体が散乱しているのに気が付いた。

『それ』は全てがひしやげ、潰れたようになつていた。

そして【彼ら】と彼女は見た。

いつの間にか、彼が【ハンマー】を構えているのを。

いきなり大勢の手下が吹き飛ばされて訳が分からなかつた【キングチャチャブー】は、それらが全て潰された死体になつてているのを見て驚愕した。

だが直後に憤慨し、その怒りのままに声を上げた。

そして手下の数に物を言わせて攻めさせた。

が、自分達よりいくらか大きいとはいえる見かける【ハンター】という生き物たかが一匹に、手下は次々に潰れた死体に変わつていつた。

相手は【ハンター】が囮まれた時によく使う、やたら眩しく暫しの間日が見えなくな

る物を投げ付ける事はしていない。

だから攻め放題のはずなのだが、攻める端から潰されていく。

いくら四方から隙無く攻めさせても、一匹たりとも相手に攻撃が届かない。

その不甲斐無さに苛々の頂点に達した【彼】は、瞬く間に手下の数を減らされて行くのに耐えられなくなり、とうとう自ら前に出た。

「おお！ 遂に貴方様にお相手して頂けるのでしょうか？」

嬉しそうな相手の物言いは、畏まつてはいたが完全に馬鹿にした口調だつた。

それになります怒りを募らせ、それを乗せて攻撃する。

が、相手は簡単に避けてしまった。

懸命に攻めては避けられている間、相手の兜の隙間から覗いている目は嬉し気に輝き、口の端はずつと上がつていた。

それに苛々を募らせるも、自分の攻撃は手下同様当たらない。

手下共々攻めてもみたが、器用に手下だけを潰して自分の攻撃だけ避けられた。

何での数を避けられるの？！

見ている彼女は驚愕を通り越して混乱までしていた。

四方八方から無数に攻めて来る【チャチャブ】相手に、【閃光玉】すら使わずに闘つ

て傷一つ負わないなんて。

いや傷どころか相手の攻撃すら届かない。どの攻撃も届く前に相手の体ごと「ハンマー」で潰している。

しかも彼が使っているのは長リーチや極長リーチのものではない。通常リーチの「ハンマー」である。

なので元々広範囲の攻撃が出来ない武器種で囮まれ、四方から一気に攻められているのなら一方的に攻撃を食らつてもおかしくないはずなのだ。

なのに、彼は逆に一方的に攻め立てている。

しかも、ただ一人で。

しかしづつと見ている内に分かつたのは、どうやら自分が知っている「ハンマー」の使い方をしていない場合がある。という事。

今まで自分が見て来たあの武器種特有の攻撃とは違う、特殊な攻撃技をどうやら彼は持っているらしい。

なので『溜め』による攻撃の変動に、どうも広範囲を巻き込むような叩き付けの攻撃があるらしいと分かつた。

と、数を減らしていく手下に業を煮やしたのか、ついに【キングチャチャブ】が進み出た。

これは苦戦するだろうと思つていた彼女は、更に信じ難い光景を目にして呆気に取られた。

嬉し気に対峙した彼は、相手の攻撃を全て避けつつ器用にも手下の【チャチャブー】のみを潰していったからである。

いくら焚き付けようがすっかり怯んでしまった手下に喚き散らしていた【キングチャチャブー】だつたが、自身の攻撃も当たらないため悔しいがここは退くしかないと決め、地面を掘ろうとした。

「逃げられると、思つてゐるのか？」

だが唸るように低いそんな声が聞こえ、恐怖で凍り付く。

それでもとにかく逃げようと再び地面を掘ろうとすると、摘まみ上げられた。

体格の差は大型【モンスター】程ではないにしても歴然である。しかもいくら喚こうが暴れようが、放してくれるはずがない。

死に物狂いで持つている棍棒を投げ付けたが、相手は当たつても意に介していないようだつた。

相手は自分をぶら下げたまま目の高さまで持つて來た。

そこで思い付き、今だとばかりに【吹き矢】で目を狙つてみる。

が、目に刺さる前に反対の手で防がれてしまつた。

しかし【彼】は奇面の中で笑みの形に口を歪ませた。

絶望の雰囲気で見ていた手下共の様子も、途端に勝機を見出したような空気になる。

【彼】は、勝つたと思った。

【キングチャチャブー】を摘まみ上げていた彼の目を目掛けて【吹き矢】が襲い掛かり、それを反対の手で防いだのを見て一瞬安堵した彼女だったが、衝撃の事実を思い出して直後に背中に【氷結晶】を押し当てられた如くに固まつた。

そして、これでもう彼は死んでしまうのだと絶望に打ちひしがれた。

思わず『約束』を忘れて駆け寄ろうとして、しかしそのまま再び凍り付いた。その瞬間、彼が【キングチャチャブー】を握り潰したからである。

驚愕した手下の前に放り投げた彼は、棘のような【吹き矢】の矢を抜いてから手下を殲滅し始めた。

まるで、何事もなかつたかのように、平然と。

彼は、この洞窟内にいる全ての【チャチャブー】を討伐し尽くすまで止まらなかつた。

「早く！　早く解毒をつ！」

ようやく動きを止めた彼に駆け寄り、彼女はそう叫んだ。

「ん？　——ああ、そうだな……」

そう答えた彼の声色は、何処か遠くを見て心ここにあらずというような、もしくは夢を見て寝言を言っているかのような、ぼんやりしたものだった。

彼はただ、何もせずに立ち尽くしている。

「早く！　早く解毒して下さい！」

そう声を掛けても反応は無い。

そこで彼女は彼の手を掴み、導くように彼のポーチに持つて行つた。

彼女は自分のポーチに【解毒薬】を入れてなかつたからである。

そこでようやく彼は気が付いたかのように、ポーチを開けようとした。

が、その動作はあまりにも緩慢で、おまけに指先が震えていて開けるのも儘ならない。

そんな様子を見かねて、彼女は彼のポーチに手を突っ込んで【解毒薬】を探り当て、彼の手に握らせた。

「……すまんな……」

ぼんやりとした口調でそう言つた彼は、ゆっくりとそれを口元に持つて行つた。しかし飲む前に蓋が開いていないのに気付き、歯でこじ開けて喉に流し込んだ。

途中でむせつつもどうにか飲み干す事に成功した彼は、効いて来たのか少し経つてか

ら疲れたような長い溜息を吐いた。

「大丈夫、ですか？」

「ああ。感謝する」

ハツキリした口調で自分に向き直つてそう言つた彼に、安堵の長い溜息を吐く彼女。途端に何故か目の前が暗くなつて、「あれれ？」と言いながら倒れ込んだ。

「……。まだ本調子では、無いのだがな」

それを見た彼は、苦笑いしてからくたりとなつてゐる彼女を抱え上げた。

そして、多少ふら付きつつも洞窟の外へ出、待機させていた【気球】で帰つて彼女を【医務室】に放り込んだ。

なんでも「今までの精神的苦痛がたたつたのだろう」という事だつた。

「貴方もふら付いているじやないですか！」

医療係にはそう言われたが、心配して追い縋ろうとまでしていた係を追い払いつつそこを出る。

そのままの足で【ギルドマスター】に報告すると、部屋に帰るなりベッドに倒れ込んで死んだように寝た。

【キングチャチャブー】を倒したという彼の報告により、この事件は取り敢えずの終息を見る事となる。

何故ならそれ以降、【チャチャブー】に襲われる者が激減したからである。